



令和8年3月27日
八王子市立川口中学校
校長 寺沢 亮

1 はじめに

- ・一人一人の生徒が、安心して、安全に学校生活を送ることができるよう、教職員が一丸となり生徒の生命を守り、人権を尊重し、教育環境の整備・充実を図る学校運営を行う。
- ・一人一人の生徒が、自分の可能性を認め、未来は自分で創り出せると信じることができるよう、充実感や成就感、自己肯定感や自尊感情を育むことのできる学校運営を行う。
- ・一人一人の生徒が、将来において、豊かな人生を送ることができるよう、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、思考力、判断力、表現力等を育み、主体的に学ぶ態度、さらに生涯を通じて学び続ける態度を身に付けさせる学校運営を行う。
- ・教育公務員としての熱意と使命感をもち、生徒、保護者、地域からの願いを受け止め、教育内容の工夫・改善に努め、誇れる川口中学校を実現する。

2 学校の教育目標

(1) 教育目標 目指す生徒像

- | | | |
|-----------------|--------|---------------------|
| 「進んで学ぶ人」 | <学ぶ> | : 生涯にわたって学び続ける人 (知) |
| 「心身を鍛える人」 | <鍛える> | : 健康で自他の命を大切にす人 (体) |
| 「責任を重んじ、豊かな心の人」 | <豊かな心> | : 豊かな人間性をもつ人 (徳) |

◎学校教育目標具現化のための川中プライドを設定する。

【 川中プライド 】

- ・あいさつ (元気で爽やかな挨拶)
- ・けじめ (自主自律の精神の醸成)
- ・思いやり (自他共に大切にする心、惻隠の情の育成)

(2) 目指す学校像

日々の教育活動を通して、「深く考える」、「分かる」、「できる」を実感させることで、生涯を通じて学び続け、国際社会に貢献しようとする人間を育てる。

- ① 一人一人の生徒が、安心して、安全に学校生活を送ることができる学校
- ② これからの社会における、どのような状況においても、柔軟に、強かに、たくましく生きていくための「確かな学力」を、一人一人の生徒に身に付けさせる学校
- ③ 一人一人の生徒が大切にされ、自分の良さが伸ばされ、生かされる学校
- ④ 家庭、地域と共に学び、高め合い、認め合う、相互に信頼関係のある温かい学校

(3) 目指す教職員像

- ①人権尊重の理念を理解し、生徒の成長のために、深い愛情を注ぐ教職員
- ②教育公務員としての熱意、使命感及び高い専門性をもつ教職員
- ③時代の変化を的確に捉え、真摯に研究・修養に励み、教育の充実、授業改善に活かす教職員
- ④学校組織の一員としての自覚と協働意識をもち、職務遂行する教職員

3 中期的経営目標と方策

(1) 主体的に学ぶ意欲を身に付け、社会人としての基礎を築く学校

- ①「深く考える授業」、「分かる授業」、「魅力ある授業」を実現し、主体的に学ぶ態度を身に付ける授業を推進することで、将来に大きな夢を抱き、自分の人生を創造するために努力し続ける生徒を育成する。
- ②友達と喜び、悲しみ、苦しみを共有することで支え合い、自他を尊重し、思いやりのある豊かな心を身に付ける教育活動を推進し、惻隱の情を育成し働かせる教育活動を展開する。
- ③真面目さ、正義感、規律や約束を守ることを大切にすると共に、正しい判断ができる生徒を育成する。

(2) 地域社会と協働し、共に成長する学校

- ①学校運営協議会を設置した地域運営学校（コミュニティかわぐち）としての教育活動の推進
- ②地域社会の拠点として、義務教育9年間を見通した、継続性を踏まえた教育活動の推進
- ③学校関係者評価に基づいた、迅速で計画性のある改善実施による教育活動の推進

4 今年度の重点目標と方策

将来の予測が困難であり、変化の激しい時代であることを視野に入れ、「確かな学力」「人間力」を身に付けた「自分の人生を創造するために、努力し続けることができる生徒」の育成を目指す。

(1) 豊かな心の育成（最重要） <人権感覚と規範意識の確立、自己有用感の醸成> 目標達成率 85%

- ①全教育活動を通して人権教育を推進し、川中プライドを絶えず意識させることで、生徒の人権感覚を高め、自他を尊重し、思いやりの態度で接し、いじめのない、安全で安心な学校をつくる。
- ②心の教育を充実させ、正義感、規律や約束を守ること、真面目に取り組む態度を大切にすると共に、自らの判断で行動し、その行動に責任が取れる生徒を育成する。
- ③「認め、励まし、褒め、支える」生徒理解に基づく指導を行うことにより、自尊感情や自己肯定感を高めると共に、相互の信頼関係を構築する。
- ④道徳教育推進教師を中心に「特別の教科 道徳」の授業を組織的・計画的に推進し、考え議論する道徳の授業を展開する。全教育活動で行う道徳教育を補充・深化・統合する位置付けとする。
- ⑤全教育活動で「ユニバーサルデザイン」を意識した特別支援教育を推進すると共に、通常学級と特別支援学級との交流及び共同学習の充実を図る。
- ⑥学校いじめ対策委員会、いじめ対応の時間を組織的に運営し、差別やいじめを見逃さず、事実を正確に捉え、共通理解・協働実践、早期発見・早期対応を徹底する。
- ⑦川口中学校「不登校生徒支援方針」を絶えず更新し取組に活かすことで、不登校生徒一人一人に応じた居場所作り及び支援を組織的に進める。
- ⑧生活指導の目的を生徒の自己指導力の育成におき、共感的人間関係を確立し、生徒の自己肯定感を高める指導を展開する。
- ⑨SDGsの理念を柱とした国際理解教育を推進することで、多様な見方や考え方、価値観に触れさせ、共生社会実現への基礎を築く。
- ⑩環境は人を育てる。清掃活動、机やロッカーの整理・整頓、掲示物等、校内環境の整備に努める。

【 豊かな心の育成 】

◎全国学力・学習状況調査

○八王子市版生活・学習に関するアンケート

□生徒意識調査

生徒 「あてはまる」「だいたいあてはまる」回答率 (%)		平均 (%)
1. 川中プライド (あいさつ・けじめ・思いやり) の実践	88.4	88.6 (昨年比+6.1)
2. いじめを許さない学校づくりへの取組	79.3	
3. 生活指導への適切な取組	88.8	
4. 自他の大切さを認め、行動できる力を育む教育	87.2	
5. 自分には良いところがある ◎	77.9	
6. 先生はあなたの良いところを認めてくれる ◎	88.4	
7. 困っている人を進んで助けている ◎	80.0	
8. いじめはどんな理由があってもいけないと思う ◎	93.7	
9. 普段の生活の中で、幸せな気持ちになることがある ◎	97.9	
10. 自分の成長や進路・将来などについて、相談できる人がいる ◎○	89.2	
11. 学校生活が楽しい □	96.2	
12. みんなで何かをするのは楽しい □	96.2	

保護者・地域 「あてはまる」「だいたいあてはまる」回答率 (%)		平均 (%)
1. (保) いじめを許さない学校づくりへの取組	81.2	91.1 (昨年比+13.8)
(地) いじめを許さない学校づくりへの取組	100	
2. (保) 生活指導への適切な取組	86.2	
(地) 生活指導への適切な取組	92.9	
3. (保) 自他の大切さを認め、行動できる力を育む教育	86.8	
(地) 自他の大切さを認め、行動できる力を育む教育	100	
4. (保) 授業や学校行事に意欲的に取り組める指導	89.0	
(地) 授業や学校行事に意欲的に取り組める指導	92.9	
5. (保) 特別支援教育の組織的な取組	95.1	
(地) 特別支援教育の組織的な取組	100	

教職員自己評価 「あてはまる」「だいたいあてはまる」回答率 (%)		平均 (%)
1. 人権教育を推進し、いじめのない心の居場所のある学校	91.7	89.6 (昨年比+13.8)
2. 明るく爽やかな挨拶を交わし合える学校環境	88.0	
3. 正義感や真面目に取り組む態度を大切にする心の教育の充実	91.3	
4. 「認め・励まし・褒め・支える」生徒理解に基づく指導	100	
5. 考え議論する道徳の授業展開	81.0	
6. 特別支援教育の推進 (合理的配慮の充実等)	90.9	
7. いじめや差別への早期発見・早期対応の徹底	91.7	
8. 不登校生徒一人一人に応じた環境づくり 組織的支援	87.0	
9. 校内環境の整備	92.0	
10. 国際理解教育の推進	81.8	

豊かな心の育成

総括達成率 89.8 % (昨年比+10.8)

【自己評価】

本校の最重点目標である「豊かな心の育成」について、生徒、保護者・地域、教職員を対象としたアンケート結果からの分析では、総括達成率は 89.8% となり、目標達成率 85% を上回る結果となった。昨年度の総合評価 79.0% と比較して大幅に向上しており、学校全体として改善が進んでいることが数値として示された。

生徒アンケートの総合肯定的回答は 88.6% (昨年度比+6.1) であり、「川中プライド (あいさつ・けじめ・思いやり)」の実践や「生活指導への適切な取組」、「自他の大切さを認め、行動できる力を育む教育」など、規範意識や人権感覚の育成に関わる項目において一定の成果が見られた。一方、「いじめはいかなる理由があってもいけないと思う」は 93.7% と高い水準ではあるものの、本校としては 100% であるべき項目であり、依然として課題が残っていると捉えている。いじめを「許さない」という価値観を、知識や意識の段階にとどめることなく、日常の言動や判断に確実に結び付けていく指導のさらなる充実が求められる。

また、「自分には良いところがある」(77.9%) や「将来や進路について相談できる人がいる」(89.2%) といった項目では昨年度より数値が低下しており、自己肯定感や自己有用感の醸成については、引き続き生徒一人一人に寄り添った指導と支援の在り方を見直していく必要がある。

保護者・地域アンケートでは、総合肯定的回答率が 91.1% (昨年度比+13.8) と大きく向上した。「いじめを許さない学校づくり」「生活指導への適切な取組」「自他の大切さを認め、行動できる力を育む教育」など、学校の基本的な取組について高い評価が得られている。学校が落ち着いた教育環境を維持することで、保護者・地域からの信頼感が高まっていることがうかがえる一方、今後も学校の教育方針や実際の取組を丁寧に発信し、実態に基づいた理解を得ていくことが重要である。

教職員アンケートにおいては、総合肯定的回答率が 89.6% (昨年度比+13.8) となり、「認め、励まし、褒め、支える」生徒理解に基づく指導については 100% の肯定的回答を得た。教職員一人一人の地道な実践と協働が、生徒の安心感や学校の落ち着きにつながっていると考えられる。また、体育祭や合唱コンクール、校外学習等の学校行事や、掲示物を含めたユニバーサルデザインの導入を通して、特別支援教育を全校的な教育活動として捉え、すべての生徒にとって学びやすい環境づくりが進められてきたことも評価できる。さらに、「考え議論する道徳の授業展開」や「校内環境の整備」など、昨年度課題としていた項目で改善が見られた。一方、「国際理解教育の推進」については肯定的回答が大きく向上したものの、特定の学年における取組にとどまっており、今後は全校的・計画的な教育活動として位置付け、組織的に推進していく必要がある。

以上のことから、本校における「豊かな心の育成」に向けた取組は、教職員の努力により着実な改善が図られてきたと評価できる。一方で、いじめを決して許さない意識の徹底や、生徒の自己肯定感・自己有用感のさらなる向上、教育活動の全校的な組織化といった課題も明確になっている。本年度の結果を通過点とし、質的な見取りから明らかになった成果と課題を次年度の教育活動に結び付けることで、教育の質を高め、安全で安心な学校づくりをさらに推進していく。

【学校関係者評価】

学校運営協議会としては、本校が最重点目標として掲げる「豊かな心の育成」について、学校全体として取組が着実に進み、生徒の姿や学校の雰囲気にも明確な改善が見られると評価する。自己評価分析に示されているとおり、生徒・保護者・地域・教職員の総合肯定的回答率の平均が約90%に達し、前年度から大きく向上していることは、本校の教育活動が確かな成果を上げていることを客観的に裏付けている。

体育祭や合唱コンクール、校外学習などの学校行事においては、生徒が主体的に活動し、互いに協力し合う姿が随所に見られる。地域においても、生徒から「学校生活が楽しい」との声が聞かれることがあり、「学校生活が楽しい」「みんなで何かをするのは楽しい」といった項目で生徒の肯定的回答が高い水準にあることは、安心感や所属感を基盤とした学校生活が実現しつつあることの表れであると捉えている。

生活指導の面では、地域で生徒が進んで挨拶をする姿が定着しつつあり、校外での不適切な行動を目にする機会が減少していることから、規範意識の育成が着実に進んでいると評価できる。特に、「いじめはいかなる理由があってもいけないと思う」と回答した生徒が9割を超えている点は、人権感覚の育成という観点から高く評価すべき成果である。

また、学校が学校運営協議会に対して学校の状況や課題を丁寧に説明し、地域とともに課題解決に向けた協議を重ねていることから、地域運営学校としての機能が適切に発揮されていると感じている。保護者の学校教育への関心にばらつきがある中においても、保護者・地域アンケートの肯定的回答率が9割を超えていることは、落ち着いた学習・生活環境が家庭や地域にも実感として伝わっている証左であり、教職員の継続的な努力の成果である。

一方で、課題も明確である。「自分には良いところがある」と感じている生徒の割合が約8割にとどまっていることや、自己有用感に関わる一部項目で前年度より数値が低下している点は、今後の取組の方向性を示す重要な示唆である。自己肯定感や自己有用感のさらなる醸成に向けては、学校での指導に加え、家庭や地域における「認め、励まし、褒め、支える」関わりを共有し、協働して生徒を支えていく視点が一層求められる。

また、生徒評価と教職員評価の間に一定の差が見られる点については、どの学校においても起こり得る現象であるとしつつも、本校においては、「川中プライド」が理念としては理解されている一方で、日常の思考や具体的な行動の出発点として十分に機能していない生徒が一定数存在する可能性があるかと捉えている。今後は、教科指導、生徒指導、学校行事、生徒会活動など、あらゆる教育活動において、指導内容と川中プライドを意図的に結び付け、生徒自身が「何を考え、どのように行動することがプライドの実現につながるのか」を具体的に考え、実践する機会を計画的に積み重ねていくことが重要である。

現在の本校は、かつて課題が顕在化していた状況から大きく改善し、安心して落ち着いた学校として確かな基盤が築かれている段階にあると評価できる。しかし、現状の維持は後退につながりかねない。学校運営協議会としては、「豊かな心の育成」を教育活動の出発点であり終着点として捉え、これまでの成果を土台に、取組をさらに深化させていくことを強く期待する。

(2) 学力の向上 <基礎的・基本的な知識及び技能習得と学習意欲の向上> 目標達成率 80%

- ①主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業を柱とした研究を充実させ、魅力ある授業を展開する。
- ②授業の中で、「本時のねらい」「本時の流れ」を明示すると共に、深く考えるための主発問の提示及び生徒の主体的・対話的な活動を必ず1回設定する。さらに課題解決の場面において、「授業の振り返り・まとめ」の時間を設定し、生徒自ら学習への課題意識をもち、学びに向かう力を育む。
- ③チャイムによる始業・終業を徹底し、けじめを付けさせ、集中力を向上させ、学習規律を高め、落ち着いて学習に取り組める環境を整える。
- ④学力調査（全国・都・市）及び定期考査等の結果分析により、生徒一人一人の学習到達状況を把握すると共に、学力定着プロジェクトチームを中心に改善策を講じる。
- ⑤論理的に思考し、自らの考えを深め、それを発信することを通して、知識の定着を図る。そのために、話し合い、プレゼンテーション、ポスターセッション等を取り入れた授業や伝え合う場の設定を充実する。
- ⑥教科担当者による面談等、学び方に関するガイダンスを充実すると共に、ドリル型学習コンテンツを活用し、意図的、計画的な学習課題を提示することで、家庭における学習習慣の定着を図る。
- ⑦GIGA スクール構想に基づき、学習用端末や ICT 機器を効果的に活用することにより、個別最適な学びの実現を図り、生徒の学ぶ意欲を高めると共に、学力向上を図る。
- ⑧放課後及び長期休業日等において、計画的に補充学習を実施し、学力の定着を図る。
- ⑨PDCA サイクルに沿った、指導と評価の一体化を単元のまとまりごとに行うことで、教員の指導力の向上及び生徒の学力向上を図る。
- ⑩学校図書館を効果的に活用した授業を推進し、『整理→考察→発信』する学びの流れを構築する。

【 学力の向上 】

◎全国学力・学習状況調査

○八王子市版生活・学習に関するアンケート

△都 学びに向かう力等に関する意識調査

□生徒意識調査

生徒・保護者 「あてはまる」「だいたいあてはまる」回答率 (%)	左は昨年	平均 (%)
1 先生は、授業のはじめに学習のねらいや目的をはっきりと示している	94.1	87.8 (昨年比+3.2)
2. 先生の教え方は、わかりやすい	91.9	
3. 先生のパソコンやプロジェクター等の ICT 機器を用いた授業はわかりやすい	86.7	
4. 先生の授業の進め方はちょうどいい	93.8	
5. 先生は、授業を時間通りに始め、時間通りに終わっている	96.4	
6. 先生は、学習への取組をきちんと評価している	95.0	
7. 「わかる授業、できる授業、考える授業」を基本として、授業が進められている	94.6	
8. 授業は自分に合った教え方、教材、学習時間になっている ◎	69.5	
9. 先生は、理解していないところについて、分かるまでおしえてくれている ◎	77.9	
10. (保) 工夫した授業が展開されている	86.0	
11. (保) 学習に対する評価は適切・公平である	87.1	
12. (保) 学校は、放課後学習教室やテスト前補習などによく対応している	82.1	
13. (保) 授業において、ICT 機器の活用などの工夫に取り組んでいる	86.0	

生徒自己評価 「あてはまる」「だいたいあてはまる」回答率 (%)		平均 (%)
1. 授業がよくわかる □	85.5	79.1 (昨年比+1.7)
2. 学ぶ目的をもって授業に取り組んでいる □	92.9	
3. 学習の課題を解決できるよう自分なりに工夫している ◎○	77.5	
4. 授業では、前の時間までに学習した内容と結び付けて考えている △	74.7	
5. 自分の学力に応じたコースに分かれて授業を受けることに満足している △	87.7	
6. 家庭で、学校や塾、習い事などの課題・宿題に取り組んでいる ○	72.5	
7. 自分で計画を立て、時間を決めるなどして、課題・宿題に取り組んだり、テストの準備をしたりしている ○	76.1	
8. 学習で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができている ◎	62.1	
9. 友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる ◎	83.2	

教職員自己評価 「あてはまる」「だいたいあてはまる」回答率 (%)		平均 (%)
1. 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業展開	87.0	83.1 (昨年比+13.5)
2. 「授業のねらい」の提示と「授業の振り返り・まとめ」の設定	95.7	
3. 学習規律の向上と落ち着いて学習に取り組める環境	100	
4. 論理的に思考し、表現できる力を身に付けさせる授業の展開	91.3	
5. 学び方に関するガイダンスの充実と学習習慣の確立	82.6	
6. GIGA スクール構想の確立、個別最適な学びの実現	69.6	
7. 計画的な補充学習の実施	56.5	
8. 指導と評価の一体化による指導力及び生徒の学力の向上	81.8	

学力の向上

総括達成率 83.3 % (昨年比+6.1)

【自己評価】

学力の向上については、基礎的・基本的な知識及び技能の習得と学習意欲の向上を目標に、主体的・対話的で深い学びの実現を柱とした授業改善に組織的に取り組んできた。その結果、生徒・保護者アンケートにおける肯定的総括は87.8%、教職員自己評価の総括は83.1%となり、昨年度未達であった目標達成率80%を上回る結果となった。

特に、校内研修を通して「主体的・対話的で深い学び」及び「指導と評価の一体化」に対する共通理解が進み、授業のねらいの明示、主発問の工夫、生徒同士の対話的な活動の設定、振り返りを重視した授業改善が各教科で定着しつつある。教職員自己評価において、「主体的・対話的で深い学びの実現」「論理的に思考し表現する力の育成」「学び方に関するガイダンスの充実」等の項目が大きく向上していることは、これらの取組の成果と考えられる。

また、チャイムによる始業・終業の徹底や学習環境の整備により、落ち着いて学習に取り組める環境づくりが進み、学習規律の向上に関する教職員評価は100%となった。加えて、学習用端末やICT機器を活用した授業についても、生徒・保護者アンケートにおいて肯定的評価が高く、授業の分かりやすさや学習意欲の向上に一定の効果が見られる。

一方、生徒自己評価では、学習内容を次の学習や実生活に結び付けて考えることや、自分に合った学び方で学習を進めることについて、十分とは言えない結果も見られた。これは、学力調査や定期考査等の結果を踏まえた個に応じた支援や、学習の意味付けをより丁寧に行う必要性を示していると捉えられる。特に、学年の進行に伴い、学習の目的や価値を実感しにくくなる生徒への働き掛けが今後の課題である。

次年度は、これまでの授業改善と校内研修の成果を基盤としつつ、学習到達状況の分析に基づく指導の工夫、学び方に関するガイダンスの充実、補充学習の計画的な実施を一層進める。また、評価と振り返りを通して生徒自身が学びの成果と課題を自覚し、次の学習へ主体的につなげていく指導を全校的に推進することで、学力の定着と学習意欲の向上を図り、次年度の教育活動へ確実につなげていく。

【学校関係者評価】

学校運営協議会としては、学力の向上に向けた本校の取組について、組織的な授業改善と校内研修を基盤とした取組が着実に成果を上げていると評価する。生徒・保護者アンケートにおける肯定的総括が約88%、教職員自己評価の総括が約83%となり、目標としていた達成率80%を上回ったことは、授業改善を中心とした取組が一定の効果を生んでいることを示している。

校内研修を通して、「主体的・対話的で深い学び」や「指導と評価の一体化」に関する共通理解が進み、授業のねらいの明示や主発問の工夫、生徒同士の対話的な活動、振り返りを重視した授業づくりが各教科で定着しつつある点は高く評価できる。学校運営協議会における教職員との懇談の機会を通して、授業展開や指導に対する意識の高まりを実感しており、授業そのものの質は総じて良好であると捉えている。

また、チャイムによる始業・終業の徹底や学習環境の整備により、落ち着いて学習に取り組める環境が整えられ、学習規律に関する教職員評価が100%となっている点は、本校の大きな強みである。地域の場においても、定期考査前などに生徒が自主的に学習に取り組む姿が見られ、生徒の学習意欲が一定程度育まれていることがうかがえる。加えて、ICT機器を活用した授業についても、生徒・保護者から分かりやすさの面で高い評価が得られており、学びを支える手段として有効に機能していると評価する。

一方で、生徒自己評価において、学習内容を次の学習や実生活に結び付けて考えることや、自分に合った学び方を実感することについては、十分とは言えない結果も見られる。授業のその場では理解できている、応用段階でつまづいたり、次の学習につなげられなかったりする生徒が一定数存在している可能性があり、「振り返り」の質と定着の在り方については、今後さらに工夫の余地があると考えます。

また、学力や学習意欲の違いにより理解度に差が生じることは自然なことであるが、理解度の異なる生徒それぞれに対する具体的な配慮や指導については、引き続き改善が求められる。完全な個別対応は難しい中でも、通常の指導に加え、理解が不十分な生徒への配慮、発展的に学びを深めたい生徒への工夫など、複数の指導の在り方を単元単位で用意することは、現実的かつ有効な方策であると考えます。こうした取組が、生徒一人一人の達成感を高め、学力向上につながっていくことを期待したい。

さらに、評価の在り方については、テスト結果等を生徒の責任として捉えるのではなく、指導の在り方を点検・改善する視点、すなわちPDCAサイクルにおける「C（評価）」と「A（改善）」を重視する姿勢が一層重要である。指導を評価し、改善につなげることが、結果として生徒と教職員の評価の差を縮め、「指導と評価の一体化」を実質化することにつながると考えます。

加えて、学力の形成は中学校単独で完結するものではなく、関係小学校との9年間を見通した指導の在り方についても、今後さらに検討を進めていく必要があると考えます。

総じて、本校の学力向上に向けた取組は、授業改善と学習環境の整備を軸に着実に前進していると評価できる。学校運営協議会としては、これまでの成果を基盤としつつ、振り返りの充実、個に応じた指導の工夫、家庭との連携を一層深めることで、生徒が学ぶ意味や成長を実感できる学習をさらに推進していくことを期待する。

(3) 地域社会との連携及び協働

目標達成率 85%

- ①地域運営学校（コミュニティかわぐち）として、目指す生徒像・学校像を、地域社会と家庭と学校とが共通理解のもと、より良い教育活動のために協働できる体制を整える。
- ②教育活動のねらいや方向性、成果等について、学校だよりや学年だより、学校ホームページなどを活用して適切に発信し、地域社会・家庭との共通理解に努める。
- ③地域社会と連携し、多様な教育力の活用を図り、職場体験学習や職業講話などのキャリア教育を推進し、生徒の社会的自立・職業的自立に向けての必要な意欲や態度及び能力の育成を図る。
- ④SDGs の理念に関する持続可能な社会の実現に向けた資質を養うために、地域社会と協働した環境学習・郷土学習を系統的に実施する。
- ⑤災害時に、地域で暮らす中学生として自助・共助の精神のもと、正しい判断・冷静な行動がとれるよう、地域社会と協働した防災教育の充実を図る。
- ⑥各教科等における保健指導、食育指導、安全指導等を地域社会・家庭と連携して充実させる。
- ⑦教育活動の改善を図るために、地域・保護者・生徒アンケート、生徒による授業アンケート結果をもとに自己評価を行い、学校運営協議会委員による学校関係者評価を実施する。
- ⑧地域におけるボランティア活動や各種行事に積極的に参加し、勤労・奉仕の心を育てる。
- ⑨川口中学校グループにおける合同研究及び実践を進め、義務教育9年間で切れ目なくつなぐ系統的・継続的な教育活動を推進する。

【 地域社会との連携及び協働 】

◎全国学力・学習状況調査

○八王子市版生活及び学習に関するアンケート

生徒 「あてはまる」「だいたいあてはまる」回答率 (%)		平均 (%)
1. 人の役に立つ人間になりたい ◎	88.4	73.7 (昨年比-1.2)
2. 地域や社会をよくするために何かをしてみたい ◎	63.2	
3. 小学校と合同で小中一貫教育の取組を行っている	77.7	
4. 将来の夢や希望をもっている ◎○	65.4	

保護者・地域 「あてはまる」「だいたいあてはまる」回答率 (%)		平均 (%)
1. (保) 地域運営学校としての学校運営協議会を中心とする学校づくり	76.7	95.5 (昨年比+10.9)
(地) 地域運営学校としての学校運営協議会を中心とする学校づくり	100	
2. (保) 学校だよりや学校ホームページ等による適切な情報提供	97.1	
(地) 学校だよりや学校ホームページ等による適切な情報提供	100	
3. (保) 将来の進路や生き方についてのキャリア教育の推進	97.1	
(地) 将来の進路や生き方についてのキャリア教育の推進	100	
4. (保) 小学校と合同で小中一貫教育の取組を行っている	93.1	
(地) 小学校と合同で小中一貫教育の取組を行っている	100	

教職員自己評価 「あてはまる」「だいたいあてはまる」回答率 (%)		平均 (%)
1. 地域運営学校としての地域と協働した教育活動の推進	86.4	88.9 (昨年比+8.4)
2. 適切な情報発信、地域社会・家庭との共通理解	91.3	
3. 地域社会と連携したキャリア教育の推進	95.7	
4. SDGs を意識した環境学習・郷土学習の推進	87.0	
5. 地域と連携した保健指導、食育指導、安全指導等の充実	91.3	
6. ボランティア活動への参加による勤労・奉仕の心の育成	87.0	
7. 学校運営協議会による学校関係者評価の実施	95.5	
8. 義務教育9年間を見通した教育活動の推進	77.3	

地域社会との連携及び協働	<u>総括達成率 86.0 %</u> (昨年度比+6.0)
--------------	--------------------------------

【自己評価】

地域社会との連携及び協働については、地域運営学校（コミュニティ・スクール）として、家庭・地域・学校が目指す生徒像・学校像を共有し、協働による教育活動の充実を図ってきた。その結果、生徒・保護者・地域・教職員アンケートを総合した達成率は86.0%（昨年度比+6.0）となり、昨年度の80.0%を上回り、目標達成率85%を概ね達成することができた。

保護者・地域アンケートにおいては、肯定的総括が95.5%（昨年度比+10.9）と非常に高い水準となった。特に、「学校運営協議会を中心とした学校づくり」「学校だよりやホームページ等による情報発信」「将来の進路や生き方についてのキャリア教育の推進」については、保護者・地域ともに高い評価を得ており、学校の教育活動の方向性や成果が家庭・地域と共有され、協働体制が着実に機能してきていることの表れであると考えられる。

教職員アンケートにおいても、総括は88.9%（昨年度比+8.4）となり、「地域と協働した教育活動の推進」「地域社会と連携したキャリア教育の推進」「学校関係者評価の実施」等の項目で肯定的回答が高く、地域社会を学校経営の重要なパートナーとして位置付けた取組が定着しつつある。また、「義務教育9年間を見通した教育活動の推進」についても改善が見られ、小中一貫教育の取組が着実に進展している。

一方、生徒アンケートでは、総括が73.7%（昨年度比-1.2）と、保護者・地域、教職員の評価と比べて低い結果となった。「人の役に立つ人間になりたい」は88.4%と比較的高い一方で、「地域や社会をよくするために何かをしてみたい」は63.2%、「将来の夢や希望をもっている」においては65.4%と低い数値となっており、地域との連携や取組が、生徒一人一人の将来展望や社会参画意識として十分に内面化されていないことが課題として挙げられる。特に現3年生においては、進路選択期という発達段階や学習・生活上の負担が大きい時期であることから、自己評価が厳しくなる傾向が見られる。一方で、1・2年生においては3年生よりも自己肯定感が高い傾向が確認されており、今後、学年別の結果を踏まえた分析と指導の工夫が求められる。

これらのことから、地域社会との連携及び協働は、学校運営の面では一定の成果を上げているものの、その意義や価値を生徒自身が実感し、自らの生き方や将来像と結び付けて捉えるまでには、なお改善の余地があると考えられる。次年度は、地域と協働した体験活動やキャリア教育、ボランティア活動等において、活

動後の振り返りや意味付けを一層重視し、生徒が「地域と関わること」「社会に貢献すること」を自らの成長として捉えられるような指導を推進する。成果にとどまることなく、取組の質を高め続けることで、地域社会と共に生徒の社会的自立に向けた力を育成し、次年度の教育活動へ確実につなげていく。

【学校関係者評価】

学校運営協議会としては、本校が地域運営学校（コミュニティスクール）として、家庭・地域・学校が目指す生徒像・学校像を共有し、協働による教育活動の充実を図ってきた取組について、学校運営の面では着実な成果を上げてしていると評価する。保護者・地域アンケートにおける肯定的評価が約96%と非常に高い水準に達していることは、学校の考え方や取組が地域に十分伝わり、信頼関係が深まってきていることの表れである。

実際に、地域におけるボランティア活動や各種行事において、生徒や教職員が積極的に参加する姿が見られ、地域社会との連携及び協働が具体的な行動として定着しつつあることを実感している。地域で役割を与えられた生徒が、次第に自信をもち、責任感をもって活動するようになる様子も見られ、学校では目立ちにくかった生徒が地域場で力を発揮する姿は、地域連携の大きな意義であると考えている。

また、学校運営協議会や学習サポーター等を通じて、地域人材が学校教育に積極的に関わっていることが、保護者・地域からの評価向上につながっている点も高く評価できる。従来は関心が低いと思われがちであった学校運営協議会についても、理解や評価が広がりつつあることは、協議会を核とした学校づくりが着実に浸透してきていることを示している。

一方で、生徒アンケートにおいては、「地域や社会をよくするために何かをしてみたい」「将来の夢や希望をもっている」といった項目の数値が十分とは言えず、特に3年生において低い傾向が見られることから、地域との連携や協働の取組が、生徒一人一人の将来展望や社会参画意識として十分に内面化されていないという課題が明らかであると捉えている。活動自体は評価できるものの、その意義や価値が生徒自身の生き方や将来像と結び付くまでには至っていない可能性がある。

この点については、地域と協働した体験活動やボランティア活動の後に、活動の意味や学びを丁寧に振り返り、「地域と関わることで何を感じ、何を学んだのか」「それが自分の将来や今の学校生活とどうつながるのか」を言語化させる指導の充実が求められる。また、地域との協働は学校が一方的に仕掛けるものではなく、地域側から子どもたちに積極的に声をかけ、関係を築いていくことも重要であり、学校にはその価値や意義を生徒に分かりやすく伝え、参加への意欲を高める役割が期待される。

キャリア教育については、将来の職業や進路を考えることにとどまらず、「そのために中学校生活で何を大切にし、何に取り組むのか」を結び付けて考えさせることが重要である。進学先を決めること自体を目的とするのではなく、自分の生き方を見据え、今の学びや生活に意味を見いだせるような指導が充実することで、「将来の夢や希望をもっている」と感じる生徒の割合はさらに高まっていくと考える。

総じて、本校の「地域社会との連携及び協働」は、学校運営や地域との関係づくりの面では大きく前進していると評価できる。学校運営協議会としては、今後、取組の量や広がりにとどまることなく、生徒一人一人が地域との関わりを自らの成長や将来と結び付けて捉えられるよう、活動後の振り返りや意味付けを一層重視した指導が進められることを強く期待する。

5 質の高い教職員組織の実現

(1) 資質向上のために

- ①校内 OJT を組織的・計画的に実施する。
- ②授業力向上を図るために、学習指導案に基づく研究授業（年に 1 回以上）、共同研究を実施する。
- ③学校経営計画に基づき、学年経営計画、学級経営計画を作成し運営する。
- ④保護者・地域社会・外部機関との連携を適切に行う。
- ⑤教育に関して強い使命感と高い識見をもち、指導技術に長けたプロ意識を備える。
- ⑥自分に関わる範囲だけではなく、学校全体を良くしていこうとする意識をもち行動する。
- ⑦研究・修養に励み、自己啓発を図ると共に、自己の心身の健康管理に努める。

(2) 組織的な学校運営のために

- ①報告・連絡・相談を徹底し、全職員で共通理解のもと動く。
- ②経営会議、運営委員会を充実させ機能させる。
- ③起案システムの徹底を図る。
- ④整理・整頓・清掃、物品管理を徹底する。
- ⑤コスト意識（時間・物の管理）を向上させる。

(3) 教育公務員としてのサービスの厳正

- ① 法令の遵守、信用失墜行為の厳禁。
- ② 人権感覚を高める。
- ③ 社会人・集団の一員としての常識と良識をもつ。
- ④ 言語環境を整える。
- ⑤ 来校者・電話への対応は、「明るく・爽やかに・丁寧に」を徹底する。
- ⑥ 社会人としてふさわしい服装・態度を心がける。（生徒の手本）

【 目指す教師像 】

教職員自己評価 (%)	あてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1. 人権尊重の理念を理解し、生徒の成長に深い愛情を注ぐ教職員	60.0	40.0	0.0	0.0
2. 教育公務員としての熱意、使命感、高い専門性をもつ教職員	48.0	52.0	0.0	0.0
3. 真摯に研究・修養に励み、教育の充実・授業改善に活かす教職員	54.2	45.8	0.0	0.0
4. 組織の一員としての自覚と協働意識をもち職務遂行する教職員	51.9	48.1	0.0	0.0
平均	53.5	46.5	0.0	0.0
昨年比	+16.7	-14.1	-2.6	±0.0

【自己評価】

教職員自己評価の結果から、「あてはまる」の平均は 53.5%（昨年比+16.7）、「だいたいあてはまる」は 46.5%（同-14.1）となり、「あまりあてはまらない」の回答は 0% となった。肯定的回答が 100% に達しており、教職員一人一人が教育公務員としての使命や役割を自覚し、組織の一員として前向きに職務に取り組んでいる状況が明確に示された結果である。特に、「人権尊重の理念を理解し、生徒の成長に深い愛情を注ぐ教職員」（あてはまる 60.0%）や、「真摯に研究・修養に励み、教育の充実・授業改善に活かす教職員」（同 54.2%）の項目において高い数値が示されたことは、校内 OJT や研究授業、共同研究といった組織的・計画的な取組が、教職員の意識や実践の向上に着実につながっていることを示している。

また、「教育公務員としての熱意、使命感、高い専門性をもつ教職員」（あてはまる 48.0%）、「組織の一員としての自覚と協働意識をもち職務遂行する教職員」（同 51.9%）についても、肯定的評価が安定しており、報告・連絡・相談の徹底や、経営会議・運営委員会の機能化といった組織運営の取組が、共通理解のもとでの学校運営に寄与していることが読み取れる。

一方で、「だいたいあてはまる」の回答が一定数存在することは、各項目において、自己の実践に対してなお向上の余地があると捉えている教職員が少なからずいることの表れとも考えられる。現状を一定程度肯定的に受け止めつつも、現段階に満足することなく、より高い水準を目指そうとする意識が内在している点は、本校の教職員集団の健全さを示すものと言える。

今後は、すべての教職員が自信をもって「あてはまる」と評価できる状態を目指し、授業改善を核とした校内研究のさらなる充実や、学年・分掌を越えた協働の機会を意図的に設定していく必要がある。また、サービスの厳正や人権感覚の向上、来校者・電話対応、身だしなみといった日常的な行動の積み重ねについても、互いに意識し合い、組織として高め合う風土を一層醸成していきたい。

これらの取組を通して、教職員一人一人の資質・能力の向上と、組織としての結束力をさらに高め、「質の高い教職員組織の実現」に向けた取組を継続的に推進していく。

【学校関係者評価】

学校運営協議会としては、本校の教職員が教育公務員としての使命感と責任を自覚し、組織の一員として前向きに教育活動に取り組んでいる状況が、自己評価の結果や日常の教育活動を通して明確に伝わってくると評価する。生徒の学習に対する意識の高まりを実感する場面が増えていることから、教職員一人一人が資質向上のために自己研鑽に努め、知識や指導力の修得・維持・向上に継続的に取り組んでいることがうかがえる。

特に、人権を尊重し、生徒一人一人に寄り添った指導や授業改善が、校内研修や研究授業、共同研究などを通して組織的に進められている点は高く評価できる。教職員自己評価において肯定的回答が 100% となっていることは、教職員集団としての意識の高さと、共通理解のもとで学校運営がなされていることを裏付けるものである。

また、教職員が互いに協働しながら職務に取り組む姿勢は、生徒や保護者に対する接し方にも表れており、「自信と笑顔」をもって関わろうとする雰囲気为学校全体に広がりつつあると感じている。一方で、そうした姿勢を持続・発展させていくためには、個々の教職員の努力に委ねるのではなく、周囲が支え合うサポート体制を一層充実させていくことが重要である。

課題としては、非常勤教職員を含めた教職員集団全体の一体感や、教育活動の見える化が挙げられる。主要教科の教職員については、生徒や保護者から評価や声が届きやすい一方で、非常勤教職員の指導や取組については、その実態が十分に共有されにくい面がある。授業参観の機会を複数日設けるなど、非常勤教職員

を含めた授業の様子を広く知る機会を確保することは、教職員相互の理解を深めるとともに、保護者や地域の信頼をさらに高めることにつながると考える。

また、学校が落ち着いた状況にあるときこそ、改革の歩みを止めないことが重要である。学校教育の目的は、単に平穏な学校を維持することではなく、生徒が自ら将来への展望を描き、その実現に向かって主体的に歩んでいける力を育成することにある。その目的が教職員全体で共有されていれば、状況が好転した後も取組を緩めることなく、継続的な改善が可能となる。

その意味において、「川中プライド」を軸とした学校改革を教職員全員で共有し、教育活動のあらゆる場面に位置付けていくことは、生徒の成長に直結するとともに、結果として安定した学校づくりにつながるものであると考える。

総じて、本校の教職員組織は、前向きな意識と協働的な風土を基盤に、質の高い集団として着実に成熟しつつあると評価できる。学校運営協議会としては、今後も教職員同士が互いに高め合い、改革を継続する組織文化を一層強化することで、「質の高い教職員組織の実現」に向けた取組がさらに深化していくことを強く期待する。

6 令和7年度学校評価の総括と改善の方向

【自己評価】

今年度の学校評価においては、「豊かな心の育成」89.8%（昨年度比+10.8）、「学力の向上」83.3%（昨年度比+6.1）、「地域社会との連携及び協働」86.0%（昨年度比+6.0）となり、全体の総括達成率は86.4%となった。昨年度の総括達成率78.7%と比較して+7.7ポイントの向上であり、学校全体として教育活動の改善が着実に進んでいると評価できる。

この成果は、個々の取組の積み重ねにとどまらず、学校経営計画に基づき、生活指導・学習指導・地域連携を関連付けた組織的・計画的な取組を推進してきたことによるものと考えられる。特に、生活指導を基盤とした「豊かな心の育成」を学校全体の共通理解とし、学年・分掌が役割を分担しながら一貫した指導を行ってきたことが、生徒の安心感や学校の落ち着きにつながり、学習に向かう姿勢を支える土台となっている。

また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた校内研修を柱に、指導と評価の一体化を意識した授業改善を全教職員で進めるなど、組織として学び続ける体制が整いつつある。加えて、地域運営学校として、学校運営協議会を中心に地域の教育資源を生かしたキャリア教育を組織的に展開したことにより、保護者・地域から高い評価を得る結果となった。

一方で、生徒の自己肯定感や将来展望に関わる項目には学年差が見られ、質的な課題も明らかになっている。今後は、アンケート結果を単なる数値として捉えるのではなく、その背景を組織として質的に共有・分析し、指導の改善につなげていくことが求められる。

来年度は引き続き「豊かな心の育成」を学校経営の重点に据え、生活指導の充実を基盤とした組織的な取組を一層推進するとともに、主体的・対話的で深い学びの実現と、地域の強みを生徒一人一人の力につなげるキャリア教育の充実を通して、学校全体の教育活動の質的向上を図っていく。

【学校関係者評価】

学校運営協議会としては、令和7年度の学校評価の総括において、各評価項目が概ね昨年度を上回る結果となっていることから、地域運営学校としての取組が着実に機能し、学校経営計画に基づく組織的・計画的な教育活動が成果として表れてきていると評価する。生活指導・学習指導・地域連携を相互に関連付けながら進めてきた取組が、学校全体の改善につながっていることが、数値の向上からも読み取れる。

特に、「豊かな心の育成」「学力の向上」「地域社会との連携及び協働」の各取組が、いずれかに偏ることなくバランスよく進められており、学校全体として着実な前進が見られる点を高く評価する。生活指導を基盤とした取組が、生徒の安心感や学校の落ち着きにつながり、そのことが学習への意欲や前向きな姿勢を支えていることがうかがえる。

学力の向上については、決して短期間で成果が表れるものではなく、地域の特性や生徒の多様な実態を踏まえる必要がある中で、教職員が粘り強く指導改善に取り組んでいることに対し、学校運営協議会として深い敬意と感謝の意を表したい。こうした地道な取組の積み重ねが、学校全体の評価向上につながっていると捉えている。

また、学校運営協議会に参画することで、校長をはじめとする管理職及び教職員の努力や教育にかける思いを具体的に知ることができている。とりわけ、学校経営に関する丁寧な報告や説明は、学校の現状と課題、そして目指す方向性を共有するうえで極めて意義深いものであり、その真摯な姿勢は高く評価されるべきである。

一方で、こうした学校の努力や成果が、すべての保護者に十分伝わっているとは言い切れない面もある。今後は、学校運営協議会が、学校と家庭・地域とをつなぐ「認め、励まし、褒め、支える」パイプ役としての役割を一層意識し、学校の取組や教職員の姿を、より広く、分かりやすく発信していくことが求められる。

この学校評価は、数値や報告としてまとめて終わるものではなく、ここに示された成果と課題を出発点として、次の改善へとつなげていくことに本来の意義がある。学校運営協議会としては、本評価を共有したすべての関係者が、その内容を基に一段階上を目指した改善への歩みを進めていくことを強く期待する。

総じて、令和7年度の学校評価は、学校全体として改善の方向性が明確となり、次年度への確かな足がかりを築くものとなっている。学校運営協議会としては、引き続き学校と伴走しながら、教育活動の質的向上と、生徒一人一人の成長につながる学校づくりを支えていきたいと考える。